

11 レッチェ (イタリア)

南の甘美と哀愁に迷う

Lecce

●迷路に聞こえる笛とギター

イタリアをブーツのかたちに喩えると、かかとの部分がプーリア州で、レッチェはそのなかでも先端にあたる。すなわちイタリアで最も南東に位置する。地中海の地図を描くと、その中心に向かってイタリア半島が突き出している。イタリアで陸の最果ての地は、海を中心なのである。地中海世界では富も敵も海から考えなくてはならない。

レッチェには南の都市がもつ独特の雰囲気がある。スペインのグラナダやコルドバでも感じる、甘く、そしてどこか哀しみを含んだ感覚である。夕暮れの、人が繰り出した街角に、大道芸人のギターと笛が聞こえ、傍らには犬がいる光景といったらわかっていただけるだろうか。このスペインとの共通性は、街と建物のつくり方にも現れている。旧市街地の道はまっすぐなところはほとんどなく、歩道も区別されず、袋小路が多い。建物はほとんどが2~3階で、すべてこの地方独特の「金色の」と評される石灰石できており、それほど重要でない建物は、粗石の上に石灰を白く塗っている。壁面の材料が同じ

なので、建物と建物の境界はわかりにくい。路面もみな石なので、建物と地面も連続感がある。そして街を歩いていると、バロックの壮麗な教会に何度も出くわす。それらはいずれもファサードの大きさに対して、街路に広場のような引きがなく、突然現れる。袋小路の行き止まりには住宅の入口が開いていて、なかを窺うとたくさんの鉢植えが置かれた中庭が見える。これらの街と建物のつくりは、歩く者に迷路のような感覚を与える。この迷路のような感覚こそ、グラナダやコルドバと共通する南の感覚にほかならない。そしてその都市構造はアラビア世界のそれにもつながっている。あらためて海の向こうにはシリアやアフリカがあり、その海を介した歴史があったことを思い起こさせるのである。

●バロックのうねりと過剰

レッチェはバロック様式の建築で知られる街である。バロックはスペイン語で「歪んだ真珠」を意味するといわれる。正しい形態に倦んで、わざと歪んだ真珠を珍重するメンタリティを表現した一語である^{*1}。一般に建築ではルネサンスの端正な秩序に意図的に変形を加えた様式といってよく、いわばルネサンスが平滑で狂いのない面とその構成であるとするれば、バロックはその面を前後に歪ませうねりを与えたものといえる。その重要性はうねりがもたらす陰影と凹凸であり、それが空間の濃淡と緩急を生み出す。

もうひとつ、バロ



図1 レッチェ 夕暮れの街角。曲がりくねった道がつづく



図2 レッチェのサンタ・クロチェ 加工しやすい石でできた装飾。破風のかたちが特徴的

*1 バロックの空間は「劇的」である。人を驚かせ、わくわくさせる一方で、うさんくさく、現実離れた感じがつきまとう。「劇的」な感覚は「歪んだ真珠」が珍重されるメンタリティと通じる。バロックは宗教改革期の旧教＝カトリックの様式である。カトリックは新興の勢力に対し、威厳と壮麗さで対抗した。しかし、それは誇張や虚勢を含んだ「歪み」でもあった。「信じること」に対する揺らぎがあり、「自然に」信じるのではなく、「信じること」を強制され、身を置く者もそれを了解して胸に手を当てるという「身振り＝劇」を演じる空間がバロックだという解釈が成り立つ。

*2 この傾向はスペインの植民地であったメキシコや南米の教会において極に達する。

*3 例えば文献①、文献②など

*4 レッチェから鉄道で北に40分。付近には迷路とバロックでレッチェ

ックの特徴は装飾の過剰にある。これは言い換えれば全体に対する部分の過剰であって、部分が全体に服従しないために奇形となった状態である。服飾を考えてみるとわかりやすい。化粧やアクセサリーを付けすぎるときりがなくなり、やがて空白が恐くなってすべてを飾りで埋めつくさなくては気が済まなくなる。基本的な骨格が見えなくなるほどに装飾に覆い尽くされた状態がバロックの特徴といえる。

うねりと装飾、バロックのふたつの特徴は無縁ではない。全体に対する変形も、その操作の結果は常に部分の異常として現れる。ただ、全体の変形か部分の過剰か、どちらに主眼が置かれるかによって2つの傾向があることもまた確かである。バロックの本場はローマであるが、その代表者であるフランチェスコ・ボッロミーニ(1599-1667)やジョバンニ・ロレンツォ・ベルニーニ(1598-1680)の建築は全体の変形に力点がある。バロックのもうひとつの本場はスペインと南ドイツ・オーストリアのハプスブルク家の支配下にあった国である。マドリッド、ミュンヘン、ウィーンなどのバロック建築では、強迫神経症のような装飾に埋めつくされた部分の過剰が見られる*2。

ローマ教皇とハプスブルク皇帝との、バロックの2つの傾向の分布はそれぞれの勢力圏を示している。バロック期、レッチェを含む南イタリアはスペインの支配下にあった。レッチェのバロックで最も有名なのはジュゼッペ・ツィンバロによるサンタ・クロ

を小さくしたようなロコロトンド、マルティーナ・フランカ、トゥルリという住居群で知られるアルペロベッコなど世界的に重要な街がいくつも存在する。

*5 紙が普及していなかった時代、文書は羊の皮(パリンペスト)に書かれた。同じ羊皮紙に古い文書の上から重ねて次の文書が書かれたため、以前の文書の痕跡が残る。

●参考文献

①陣内秀信『南イタリアへ』講談社現代新書,1999

②野口昌夫『南イタリア小都市紀行』丸善,1991

③『イタリア旅行協会公式ガイド5 ナポリ/シチリア』NTT出版,1997

ーチェ(1646)だが、そのファサードはうねりが少ないかわりに細かく派手な石彫で飾られている。

●「重ね書き」としての都市

迷路のような都市構造が、地中海沿岸の都市に共通して見られることはしばしば指摘される*3。その感覚をいっそう味わうにはレッチェから足をのばしてオストゥーニ*4に行くといよい。丘の上に築かれた白く輝く街は、幻を見ているかのようなのである。街の中に入ると、まず真っ白の壁面に囲まれる。くまなく石灰を塗った壁面は、あらゆるテクスチャが消されて、開口部がポツポツと開くのみで、住居と住居の境界はわからない。街路は坂道と階段で平たいところは少なく、ときには住居の壁が階段を支え、屋根の上が路になっていたりする。ここでは建物と建物の境界をいうのが無意味であるのと同様に、建物と都市もまったく一体である。白く輝いて見えた街は巨大なひとつの集合住宅とさえいえる。

オストゥーニでは建物がいつできたかと問うことも無意味である。街は遠く長い時間のなかで少しずつ石を積み上げかたちを変えてきたのだろう。その様子はまさに「重ね書き*5」であり、以前の線が消えることなく、その上から次の線が書き加えられていく図面のようなものである。

レッチェの街もまた、バロックの装飾を纏ってはいるものの下層には「重ね書き」の歴史が潜んでいるのであり、それこそが迷路を生みだしてきたのだ。



図3 オストゥーニ 丘の上に輝く白い固りが街



図4 オストゥーニ 白い壁面の開口部



図5 オストゥーニ 住居の間をつづく外階段